きびのさと
N055
月刊
第三號 昭和廿八年一月一日 發行 （非賣品）
發行所 岡山県都窪郡吉備町東町 一二五 宇垣方
吉備観光協會

向庵大師堂

大内田の千手寺の真南に向い合った、山腹の樹林中にみえる御堂にして祭る所は弘法大師である。参道は公会堂の裏から南へ、池の築堤を通り竹藪に包まれた薄暗い小径を抜け、無造作に繋る雑草をおしわけながら五十米ほど乱れた磴道を登っていくと本堂の前に出る。いまわ荒れ果て て庵主の姿もみえず、軒は破れ、雨はもり本堂の周囲には蓬々と名も知れぬ雑草が生い繁ってみる影もない。しみじみ堂前に佇んで遠望すれば、大内田の村落を眼下にして、吉備町の全景を掌中に収めらるる展望台である。草叢に埋もれて

一、蓮華院観月心淨信士　天保十三壬寅年十一月廿四日
　蓮台院心月智淨信女　文化七庚午歳八月廿四日
　裏面　当庵　施主　荒井幸之進　範光　同人　妻　琴

二、延明五丑年三月廿七日　荒井寅蔵

三、寛政八丙辰年五月初五日　法賢童子

四、文化四丁卯天七月十九日　玉露童子

の四基の墓石がある。当庵の創建の棟札が千手寺に保存されている。縦十二糎、長さ四十糎の木札に

天明六丙午歳　大師堂当村建立為寅蔵童子一廻忌追善　武井鉄之丞輝高十六歳書之　大工棟梁塩飽半島藤原末孫　大倉傳五郎政光

裏面に　当村武井鉄之丞輝高書之

とあり。即ち荒井幸之進が、件の寅蔵の死去した翌歳に一回忌追善のために建立したものである。しかしこの荒井氏が大内田で如何なる地位の人物であったか、詮索すべき資料はない。また棟札を書いた武井鉄之丞輝高との関係も詳かにしがたい。

千手寺の書翰に

一筆啓上仕候倍御安泰被成御座候村光畑喜兵衛ヲ以御相談申上候處御寺内ニ御礎置朝晩御勤の御序ニ御回向ヲも被成下　台華院妙貞信女石碑仍而　先祖代々為聖霊菩提当所　九日厩山（クニチ、テンヤマ）一ケ所上ハ御寺山境切下ハ政平ヘ坪井姓ヘ墓所境　前年買求候歩証文別紙相添仕す志　後々永代御寺元指上申候若聊申者御座候て別紙証文以御取捌ニ進候為　右以口礼如斯御座候　恐惶謹言

寛政元年酉ニ月　弼重々御恙不可通口候　就ハ先塊当御兼知被成下

千手寺　法印覚道尊

　武井周倉

周倉の傍に（李備前産宰々後医師頼請待当所居住）と加筆してある。ニれは武井周倉という人が、クニチデン山の一区劃（いま俚人はクニチジンという）の私有地を証文までつけて、千手寺へ先祖代々の供養料のために寄進した書面であるが、その証文は紛失していまはない。

括弧内の加筆文字は覚道（憧）和尚が、武井周倉の人柄を後世に知らしめるために書かれたものである。武井氏の家系は不明であるが、備前の生れで医師であったが、大内田の招請によって来住した人である。

天明六年に武井輝高という十六歳の少年が向庵大師堂建立の棟札を書いているが、寛政元年より四年前である。当村には武井姓は他になく、或は周倉は輝高の父ではないかと考へられる。そして台華院妙貞はその妻で、光畑喜兵衛という人の娘ではないかと思はれる。

口碑によると昔この地に荒井り楠右衛門という豪家があって、数人の子供を貰うけたが、いづれも幼少にして死去し、間もなく妻にも先きたたれて、寂しい孤独の生活を送り、荒井り家はついに断絶したという。千手寺の門前に

荒井り約兵衛童子霊位　明和五戊子八月三十一日

と刻んだ小さな石地蔵の墓石がある。楠右衛門という人と、なにか関係があるのではないかと思う。楠右衛門は一説に名ある力士といい、その

姓は荒井にして荒井川は力士名ではないかと考えられる。前述の当庵施主荒井幸之進父子の墓石にある年代及び推察して、楢右衛門といわれる人は幸之進と同一人ではないかと想像するのである。次に荒井氏の事蹟について考えれば、村の金持であったことは推測されるが、まとまった歴代の墳墓も發見されないので、いまの終戦成金のように、なにかの動機をうまくつかんで物質を獲得したと思はれる人である。向庵は千手寺の管理にして、其后法灯は続けられたが、大正の初期に霊験新たかな奇瑞が顕現したというので、近郊から参詣する善男善女が晝夜の別なく、あとを絶たず堂宇も常住し盛大な祭りも行われたが、次第に衰えていまは賽者の姿もなく、寂寞として荒れるがまゝに委せている。参道の傍に数基の墳墓がある。そのなかに「大森氏於蘭之墓、寛延二己巳年六月十二日」とある。なにか由緒ある女性の墓標と思はれるが系統についてはわからない。

○ 三谷大師堂

吉備町から早島へ越す矢尾の峠道を辿ると、左側の路傍に地上高さ石燈十七燈角の石標に

奉納寅五十番　大願成就　北高尾村　石工　妹尾幸次郎　亥生男

三谷奥之院　明治廿七年午旧三月吉日

と刻んである。ここから径道を踏んで渓谷に下ると右手の樹間に苔むした泉水があってその側に二段の台石の上に、宝珠を両手に戴いている座像の石地蔵を刻んでいる高さ百五十一糎、幅八十六糎の碑がたてられている。

表面　陸海軍忠死群霊　皆成佛

裏面　証菩薩　土山地蔵菩薩　施主谷家先祖累代

大正元年九月建之　庭瀬町　石工　木村栄次郎鐫（ほる）

一糎の部分は観世音菩薩の立像を刻み、下部は六角形の柱石に一供養塔　惣仇　岡本和次郎」とある。一段目の台石は正方形にして石面には建設した人々の氏名が彫られている。

都窪郡　吉備　御津郡

発起者行者

大内田　池田玉澄　小野和三郎
下庄　坪井柳造　中川国太郎
下撫川　平松松三郎　矢部　赤浜
下庄　平松富三郎　林　石田傳吉
池上安太郎　金井尹　国府竹三郎
平松源吉　妹尾崎　中野柳造
同　黒住武市　上東　坪井惣吉
一宮　小西藤五郎　同　中田市造
惣仇　中山善太郎　下庄　平松才一
東山　佐野熊吉　原　猪造
尾上　池上柳次郎　平松紋三郎
高松　光田徳次郎　下撫川　鬼島忠吉
惣仇　太田谷五郎　同　荒木鹿次郎
小西　芳谷徳右エ門　大内田　鈴山荒吉
宮内　赤木喜左エ門　同　老畑千代吉
栗坂　赤木柳次郎　下庄　平松老太郎
同　池上元吉　福崎　萩原藤之助
下庄　矢部　千田寿治郎
三手　渡辺静敬
大橋　荒木条次郎
東町　山上鶴吉
以上

世話人

中撫川　岡本富吉
小西　脇本恒三郎
奥金　古城慶次郎
同　金友金次郎
東阿曽　文盛　琴

この供養塔から更に山間を辿ると「天満宮霊水」とした石標のもとに、清冽な泉が湧いている。本堂はこの泉の右手である。

御堂の側に高さ八八糎、横五六糎の自然石に「三石八十八所　南無大師遍照金剛　世二所観世音菩薩」の碑がある。

その南側に高さ七三糎、厚さ一二糎、横六〇糎の石碑に「発起人　西国観音香川県土族　池田玉澄　行者　坪井柳造　大内田　平松松三郎　下庄　平松富三郎　撫川町　池上元吉」

岡山市門田屋敷　信者　冨永ヨシ
鬼島郡福田村石工請負　岡野仙太郎
駈者　播野老次郎

本堂前の參籠堂は住む人もなく、建物は荒廢し、詰ずる人影もない。
ここは人里に遠ざかり緑翠に覆はれた閑静な一小域に過ぎないが、煩はしきこの世の生活の中と時を、ここに足を運ばせてのんびりと自然に立帰り、心の塵を掃うふん囲氣は、人ずれのした観光地よりも「花をのみ待つらむ人に山里の　谷間の苔の春を見せばやし」の句の如く、その窓を深くするものがある。
背後の山道を登ると、天神山の頂に達する。ここは眺望佳にして北方遥かに吉備の中山を指呼の間に收め、眼下に吉備町の全貌が俯瞰せられる。

○　番神堂

国道二号線の住吉口から北へ行った中挿り本村にある。石の華表を潜ると左側に題目石とほかに二つの石碑がある（碑五輝題目石碑参照）正面に三間四方の本堂が西向に建てられている。祭る所は日蓮宗徒の崇信する三十番神である。明治の初年神仏分離の際新屋敷の八幡神社に祭祀していた三体の尊像をここに遷祀し、旧例によって信仰の中心となっていたことがある。
もと本堂は二間四方の建物にして、南向であったが明治の末期にいたく損壊したので大正四、五年の頃塚山の永坂にあった恩汐門堂が国山の蓮昌寺へ退轉したので、その建物を買拾余円で譲り受けて再建したのが現今の御堂である。取毀ちの際、縦五二糎、横一一糎の棟札が発見された。その銘に
「南無妙法蓮華経　文化十四丁丑歳九月吉辰日　法王山十五世　日長㊞」

大工棟梁　福永増五良」。とあるので文化十四年九月の創叡にして三十番の神を勧請したことは確実である。日長とあるは信城寺の住職即善院にして、いま山号は法正山に改められている。
三体の尊像というは鳥神、日蓮、神功皇后にして神仏混淆を現はしたもので、開口七五糎、奥行五〇糎の神殿造風の祭殿に納められている。いづれも尊容は木彫座像（台座あり）高さ二四糎である。正面は両開きの戸扉をつけ、外部の両脇には右に七五の桐、左に十六瓣の菊花の紋様を配している。尊像と祭殿はいづれも極彩色を施している。佛師は岡田正三九、烏城雄吉作と銘があるが年代は不明である。
また別に吉田大明神を祭っているが、系統は詳かでなく御尊体は木片に六字の題目を書き、御幣を奉戴している。これは文政の頃この地方に悪疫が流行したので平癒祈願のために勧請したと傳えられている。

○　観音堂

旧国道の観音堂地内の曲り角にある。建物は二間四面にして南向、入母屋造り本瓦葺屋根である。本尊は恵心僧都の作と傳へられる千手観音菩薩を安置している。創始の年代は不明なるも、杉林寺十世鷲山和尚禪師の開山になるものという。同禪師は宝暦九年に示寂しているので、恐らく寛延ゆう宝暦の初年に創建されたものと考えられる。よって当堂は杉林寺の管理する處で、このあたりの地名を観音堂というはこの堂宇から起ったのである。堂宇の内陣に

当庵　開山鷲山顯和尚禪師　宝暦第九己卯年正月廿一日寂
当庵　中興雲山慧龍禪師　安永三歳四月廿九日

の位牌が安置されている。思ふに最初は本堂のみであったが、雲山和尚が中興とあるので明和の頃に円通庵という草庵を東隣に結び、時に居僧を置いて観音堂を管理させたようである。歴代の庵主を知ることは出来ないが杉林寺の墓地に一基ある。その銘に
「法智順法尼、嘉永七年甲寅十一月九日没

播州完栗郡塩田村辛川氏女在就出家住居円通庵累年也当山復史空帝未有作善之功更縫繍袈裟肩措常住永世為修追福矣　看護　敬道

とあり。敬道は鷹倩寺の僧にして七十一歳で示寂しているが、初め松林寺に居り、この碑文は敬道がせと歳の筆である。

この円通庵はいま廃絶して民家になっている。明治の中頃箕島の何某というものが、子安地蔵尊を背負い六部に身を窶し、諸国を遍歴して帰郷し一宇を建立してこの尊像を安置し衆生を救はんと念願していた。偶当時松林寺の維内禅師に遇い、その助力によって多年の宿願が叶い、円通庵の建物を譲り受けて居島郡興除村の中畦に移し開基したのである。

本堂の脇に法界堂がある。内部に法界と刻んだ台石の上に高さ二尺ばかりの石地蔵尊の立像を安置している。「宝暦十二年午六月十四日、念佛講中」と銘文がある。もと露石佛であったが堂宇に納められ、其后朽壊したので昭和三十二年の五月十五日、部落の太田左三郎　水船正男　岡野崎音次郎　安井勝太郎　高橋八太郎　英馬等が発起によって数萬円の浮財をもって再建したのである。

この地蔵尊の右側に高さ六の煙ばかりの自然石の墓碑がある。表面に「祖月清意大姉」左右の両面に「享和元辛酉歳十一月十日　高原氏」の文字が刻んである。もと円通庵内にあったものをここに移した。高原氏は如何なる人柄かわからないが、松倉氏の家臣に御用人近習頭高原甚五左衛門（禄高百五拾石）というがあり、累代の墓石は松林寺にある。その系統の女性ではなかろうか。戒名に尼とないので庵主ではなく、当時の円通庵主と親しく、死後ここに葬ったのではないかと思考される。

九郎稲荷宮

平野の内、東平野にある。国道二号線から北へ三百米の田圃中に一本の樟樹が繁茂するもとに、鎮座するお宮である。

細い田圃道を辿って宮の前へくると石造の狐が両側にある。これは平野出身の太田　稔、同敬の兄弟が昭和十三年二月に寄進したものである

ここを通っていくと、右に金崎天王を祭る一小祠と、稲荷宮がある。

「正一位九郎稲荷宮　源　廷琛」の扁額がかかげられている。筆者の廷琛は松倉氏の家宰森岡喜多右衛門武從にして、四十三歳の時である。

創建については知るべき資料はなにもないが、もと八幡宮の参道の右側、平地になっている處に鎮座していたが平野村の懇請によって現地に遷祀したものである。思うにこの稲荷は高松最上稲荷の分身であろう。

金崎の宮の左に蒼旅を祭るお宮がある。その傍に「口宝珠金神鎮座」と刻んだ十五糎角の風化した古色蒼然とした小さな石碑がたてられている。こゝにおいて考へれば、往昔金崎宮、即ち金神様の鎮座していた場所へ九郎稲荷の祠を移したものと思はれる。管理は日蓮宗中正院にして御道によっている。宮に保存の棟札がある。縦四二糎、横七二糎の木板にして銘に

表面　南無妙法蓮華経　九郎正一位稲荷大明神鎮座　維時嘉永第五壬子年四月吉辰　別当中正院十有五世祈願具足心大歓喜処

裏面　御高五百三拾石三斗五升五合壱勺　東平野村庄屋太田元四郎　年寄　惣代　銀平、久四郎　世話人　林兵衛、彌助

西平野村庄屋格太田徳蔵　組頭　野崎伊三郎　同　野崎兼吉　惣代　久蔵、儀兵衛　世話人　勇吉、長蔵、金七

嘉永五壬子年四月

御高九百八拾三石九斗壱升八合

とあり。中正院十五世は実相院日栄にして、嘉永七年四月十四日に示寂している。昭和三十年六月廿五日には遷座祭と百年祭の盛大な行事が催されたのである。

○地蔵堂（栄町）

「蓮宗中正院の東脇・路傍に一間四面の方形造本瓦葺屋根の地蔵堂があ
る。内部には石造蓮花台彫りの上に高さ三四糎の石地蔵の座像を安置し
その台石に「法界」の文字が刻んであるが、年号が見当らない。傍に「
奉納　大象妙典式部　書写慧龍謹誌　丁卯年六月修覆」。と表書した二
五糎角位の木箱のなかに、木皮紙石枚かに丹念に大象妙典の経文を書う
つしたものが納められている。この筆者慧龍は観音堂を中興した禪僧雲
山慧龍和尚である。和尚は安永三年四月九日示寂しているので、この書
写は孔の廿七年前の延享四年六月に当り、また木箱に修覆と書いてある
ので、この堂が創建されたのはそれ以前に遡るものと考えられる。

棟札に

国家安全五穀豊饒　慶應三「卯年六月吉日
奉看読金剛般若波羅多陀経祈攸
風雨順調諸縁繁昌　清水山松林寺住持白

年号から推察してこれは松林寺十六世嘆山延恕和尚である。毎歳七月には部落のものが祭事を営むという。

古老の話に、往昔ここを流れる濠隍は川底も深く、淋しい町筋に面して
いたので往々身投して水死するものがあったので、ここに露石佛を
安置したといつている。俗にこの流れを牢屋川といつている。これは
中正院の敷地がもと藩政時代の牢獄の跡なのでその名が残ったという。
或は牢獄の門前なので石地蔵を建てて罪科のものを戒めたとも傳えく
る。

毎年七月廿四日は昔から全国的といつてよい位地蔵盆会という祭事が
行われる。これは地蔵尊にお供物をして、もろ〳〵の先祖の精霊を弔ふ
ために供養することから始まつたもので、地蔵尊が童形に似ている為か
ら子供に親しまれ、いつの頃からか子供の祭りに変つてきた。当日は常
町の真言講中から当番を定めて地蔵尊にお供物をし、卍字のある提灯を
ともげて飾り、「まめじや」といつて大豆を炒つて白米と共に焚いたも
のを皿に盛つて子供連中に施し、講中の男女が集つて看経(カンキン)するの

九

である。(カンキンはもと導師のみが磬をあげて読経し、黙つて経文を看ることであつたが
今は誤つて皆んなが大磬を出して読経に合するようになつた)。

○

地蔵堂　(中田)

中田の若宮八幡宮の西にある。一間四面の一小堂にして昔この地に寺
院があつたと傳えられているが如何なる寺名かまた廃絶の年代も詳か
でない。堂内には中央に破損した石地蔵を厨子に納めて安置してあり、
右に一つの地蔵尊がある。その銘に

「寛政十戊午年　法界、石原利平蔵(以下不明)」

左の石碑には

「法界、花房先祖代々為佛果也、文化十二乙亥年十月二十四日平野氏
」。とあり。また棟札に　大工藤原治郎吉章、世話人
「奉建立地蔵堂一宇、文政十年(以下不詳)　矢尾嶋之助(以下不詳)　その他に
三舩藤左衛門　伊丹口左衛門　寄附者信者中　世話人
「奉地蔵堂修繕、大正十二年四月、　風早小平」。とあり。
柴岡六吉　御舩重太郎　武南光五郎

思ふにこの御堂は文政十年に建てられて九十七年目の大正十二年に修理
を加えたものである。

お堂の西側に一基の墓石がある。銘に

「真学院一道友清居士　明和八辛卯年四月十三日　里見門兵衛明篤之墓
」。その傍に「大峯山上三十三度供艱塔、宝暦五乙亥歳九月初七黄・願
主　庭瀬　中田村　小田弥平次」。とあるも如何なる人物かわからない。
更に堂の東側に一基、「南無阿弥陀佛、念佛講中、享保三戊戌歳三月穀
旦」。台石に山中吉左衛門、石原庄助、武南弥右衛門、同弥三郎、同治
郎、同甚蔵、家本吉三良、宇野佐吉、同喜助　藤田九大夫」。の銘がある。

用糸　延花　堅
合名　吉備整経所
電吉備局一八番
庭瀬駅前
雑誌　書籍　文房具
目黒郁文堂
庭瀬　電219番

おわり